

# LECTURE

## 講演会報告

- 文学部図書館情報学科主催  
「小さな町の元気な図書館—鯖江市図書館の取り組み—」
- 鯖江市図書館長 前壽則氏
- 5/19 長久手キャンパス



公共図書館では、国庫補助金の要件である館長の司書有資格の規定等が廃止され、改正地方自治法の施行によって「公の施設」の管理運営に指定管理者制度の導入が可能になるなど、現在の図書館経営は様々な問題を抱えています。ところが、人口約6万8千人の福井県鯖江市にある市立図書館は、毎年予算が増加し、専任職員も配置され、活気にあふれています。本講演では、鯖江市図書館館長前壽則氏をお招きし、その秘訣をお聞きしました。

図書館を市民や自治体に認知してもらうために、前館長ら当時の3人の司書は、市議会、学校関係者、町内会などに図書館の必要性を説いて回る地道な活動を行いました。その結果、市長をリコールしてまで図書館を支援し育むという市民の意識の向上につながりました。決して緊張せず、あきらめず、自らの使命として図書館を鯖江に根付かせていかれたのです。他の自治体と同様に厳しい財政にありながら図書館を成長させていくには、根気と愛情が秘訣のようでした。ご講演を通して、鯖江市図書館は、市民が図書館を育て、図書館がまた市民の教養と文化レベルを高めている、誠にすばらしい図書館であることが分かりました。講演後の質疑応答も活発に行われました。

- 文学部英文学科主催  
「キャラカストーリーか  
—アダプテーション研究と物語更新論—」
- 大阪大学大学院文学研究科准教授 片淵悦久氏
- 6/9 長久手キャンパス



物語の重点はストーリー／キャラクターどちらに置くべきかという、文学研究における究極の問題を、若手アメリカ作家ジョナサン・フランフォアの『エブリシング・イズ・ミーン・トゥ・ダイ』を例にお話いただきました。アダプテーションという最新の研究動向が映像を交えてわかりやすく紹介され、小説と映画というメディアを超えた研究の面白さが伝わってきました。また、オリジナルの小説と翻案された映画を同等のものとして捉える研究姿勢も印象的でした。



- 文学部/国文学科主催  
平成22年度「日本語表現」全学開講記念  
「学びの世界をひらく国語力  
—「日本語表現」科目を全学必修に—」
- 講演会&シンポジウム
- 7/14 長久手キャンパス



有元秀文先生

学部の全学的再編と軌を一にして、来年度から「日本語表現」が全学必修で開講されます。これは大学での学修の基礎となる、日本語「テラシー」能力の一層の向上を目指すもので、国語力を大切にする愛知淑徳ならではの特色ある取り組みです。

これを記念して、講演会とシンポジウムが開催されました。講演会は「生きる力、学ぶ力としての国語力」と題し、国立教育政策研究所総括研究官の有元秀文先生のお話を伺いました。

シンポジウムは「『日本語表現』教育課程の充実を求めて—愛知淑徳モデルを精査する—」と題し、本学常勤講師の外山敦子先生よりこのプログラムの概要について説明があり、その後帝塚山大学教授岩井洋先生を始めとする他大学の3人の先生方より、このプログラムに対する外部評価をいただいた上で意見交換を行いました。

教室に入りきれなかった方々には隣の教室で同時中継画像をご覧いただき、合計550人ほどの出席者の中で質疑応答も活発に行われ、今後にとって有意義な行事となりました。

詳細は大学ホームページに掲載中の、スベシヤルコンテンツをご覧ください。

- ジェンダー・女性学研究所 第21回定例セミナー  
「ジェンダー化された自然—18世紀の博物学を題材に—」
- 三重大学人文学部教授 小川真理子氏
- 6/8 星が丘キャンパス 6/15 長久手キャンパス



私たちにとって、「自然」とは疑いのない真理であり、そこに存在する植物や動物のあり方は、自然が命ずるままのものだと思われがちです。しかし、アリストテレスの時代から18世紀にいたるまで、ハチの群れを統率する「女王蜂」は生物学的にメスであると知られていながら、「王蜂」と呼ばれていました。つまり、支配者は男であるべき、といった人間の解釈が自然界にも入り込んでいたのです。また、かつて女性は、男性の出来損ない、熱の不足で生殖器が体外に出ないまま留まった未完成品と考えられていたそうです。

学生たちが最も驚いていたのは、乳母制度に関するお話でした。重商主義を背景に、労働力の増大が必要とされた18世紀。乳幼児の死亡率を下げるために、乳母制度が見直されました。そこで、動物も人間も母乳で子育てをすることがどれほど自然なことを強調するために、「乳房動物」といった分類が人間にも当てはめられるようになったのです。

普段は社会的にのみ捉えがちなジェンダーを、自然もまたジェンダー化されている。といった観点から捉えた今回のお話は、このようにとても興味深く、ジェンダーを考え直すきっかけとなりました。



第3回 須貝展子氏



第2回 山本隆之氏



第1回 劇団四季

◎第1回  
演劇界屈指のミュージカル集団「劇団四季」。今回は「ライオンキング」のシンバ役を務めた阿久津陽一郎氏を始め、8人の俳優の方に登場いただきました。講演の冒頭にはタップダンス、プロモーションビデオ、劇中歌などが披露されエンターテイナラーらしい始まりに会場から歓声が上がりました。

講演のメインテーマである「夢の実現」については、一流の舞台上で活躍する俳優さんたちの実体験の物語が語られました。芝居がしたい、上手に歌いたい、ダンスで活躍したいといった目標のため、劇団四季に「夢のステージ」を見つけ、入団のための努力の話を、劇団四季に入った後の今、新しく生まれたい夢や想い、それを叶えるために努めていることを感情豊かに話してくださいました。参加者たちは自分の夢に重ね合わせるように、感慨深く耳を傾けていました。

◎第2回  
山本氏は、過去に放送した番組の上映を交え、テレビ番組の制作について具体的に解説。「若手社員の本音を真摯に伝え、前向きに仕事ができるノウハウを紹介する番組をめざします」と、番組制作への想いも語っていただきました。

●キャリアデザイン講演会

- ◎第1回「劇団四季がやってくる!」  
～夢を叶えたプロフェッショナルを徹底解剖!～
- 劇団四季 阿久津陽一郎氏ほか
- 6/1 長久手キャンパス
- ◎第2回「『めざせ!会社の星』」  
～チーフプロデューサーが語るテレビの裏側!～
- NHKビジネス情報番組『めざせ!会社の星』  
チーフプロデューサー 山本隆之氏
- 6/17 星が丘キャンパス
- ◎第3回「あこがれの化粧品会社で働く魅力」
- 株式会社資生堂 国内化粧品事業  
マス・マステージブランドユニット 須貝展子氏
- 7/10 長久手キャンパス

◎第3回  
大手法化粧品メーカー資生堂の入社6年目の若手社員須貝氏。営業として店舗の売上や集客率の向上に貢献した後、マーケティング部に異動し、ヘアケア商品のトップブランド「SUBAKI」の商品開発を担当。現在は男性のトータル化粧品ブランド「unO」のプロモーションを手がけています。学生に近い目線から化粧品会社で働く魅力をお話いただきました。

「自分が携わった商品が店頭に並ぶ時、この上ない嬉しさややりがいを感じます。資生堂研究所や協力会社の方々など、多くの人の力を合わせ、ひとつの商品を世に出していく感動は、何物にも替え難いですね」と語る須貝氏の表情はキラキラと輝いていました。

「自分の目標(着実に近づきたい)に、自分ができることは何だろうか?と常に考えることは、仕事にも、就職活動にも大切」と学生たちにエールを送った須貝氏。お話の端々から働く喜びが伝わり、学生たちにとって将来への希望をふくらませる貴重な時間となりました。

◎第2回  
山本氏は、過去に放送した番組の上映を交え、テレビ番組の制作について具体的に解説。「若手社員の本音を真摯に伝え、前向きに仕事ができるノウハウを紹介する番組をめざします」と、番組制作への想いも語っていただきました。

質問タイムでは、「仕事への原動力は?」という学生の問いに、若手時代にディレクターを務めたプロジェクト×挑戦者たち『』の制作でのエピソードに触れ、「難しいと感じていた仕事に一生懸命取り組み、成功させた喜びや達成感が今でも力になっている」と回答。これから社会に巣立つ学生へ、働く上で何が大切かも伝えてくださった山本氏。その優しさや仕事の情熱は、学生たち一人ひとりの心にきと届いたはずですよ。

さらに、講演終了後、「めざせ!会社の星」制作チームの方々や学生による座談会を開催。参加した学生たちにとって、将来への志を高める有意義な時間となったようです。

●現代社会学部都市環境デザインコース主催  
「アルヴァー・アアルトの住居観と住空間」

- 建築家 水島信氏
- 6/25 長久手キャンパス



20世紀を代表するフィンランドの建築家アルヴァー・アアルトは、生涯で建築に限らずスケッチ程度のもも含めて800件を超える作品を残しました。ドイツ在住の建築家、水島氏は、欧米にある実作のほとんどを巡り、アアルト財団の協力のもと論文も著されています。講演会では、多数の写真と図面を用いてアアルト建築に関する新たな見解をお話いただきました。

また、ミニギャラリーでは講演会に併催して、6月15〜26日、アアルトに関連した展覧会を行いました。大きな木の模型は、アアルトの生誕100周年を記念した世界巡回展のうち2003年豊田市美術館ギャラリーで開催された「アルヴァー・アアルトの住宅 愛知展」の住宅模型で、「アアルト自邸とスタジオ」(名古屋市立大学蔵)、「メゾン・カレ」(名古屋工業大学蔵)であり、さらに、学生ワークショップで制作された「マリアレオ」の実物大階段(岐阜県立森林文化アカデミー蔵)と、2008年にアアルト建築を訪ねた本学助教のスライドも展示しました。学外からも多数の来場者があり大変盛況な会となりました。

●表現文化学会 学術講演会  
「活字に埋もれた現代 わたしたちの心をつかむ言葉とは」

- コピーライター・クリエイティブディレクター 岡田直也氏
- 6/25 星が丘キャンパス



幅広い分野の「言葉」の仕事に携わるコピーライターの岡田直也氏に、言葉についてさまざまな角度から語っていただきました。まず学生たちに伝えたいと口にしたのは「言葉って、すごい」というシンプルなお言葉。日本語の膨大な体系の中では、言葉のプロであっても言葉を学ぶ日々だそうです。考える。考えを伝える。相手を理解する。自分が生きていく世界を認識する。すべて、言葉が必要なんです。だからこそ、言葉の力を信じ、自分のボキャブラリーを広げる勉強をしよう!と岡田氏は学生たちに語りかけました。

また、「漢字に変換しすぎない」「カタカナ語を多用しない」「受け手にやさしい書き方を心がける」という正しい日本語を書くために大切なことを解説。さらに、独自のコピー発想法も教えてくださいました。

その上で、愛知淑徳大学や表現文化専攻のキヤッチコピーを考えてみよう!と学生たちに提案。「赤いっばい、黒くこし」という作品をはじめ独自の視点で光る学生たちの作品に、岡田氏はおもしろい!と高評価。岡田氏にとっても、学生たちにとっても、言葉の力を実感し、言葉を楽しむ講演会となったようです。